

# 母親の育児不安に関する研究：サポート、子どもの気質、養育行動との関連

園田 菜摘

## 問 題

現代の日本社会では、核家族化、少子化、地域社会とのつながりの希薄化といった状況が進行し、親が育児のための知識や技術を身に付けることが難しくなっている。乳幼児を持つ母親の8割以上が「疲れやストレスがたまりイライラする」と答え（宮本ら, 2000）、3割以上の母親は子どもをうまく育てられないと答える（櫻谷, 2002）など、多くの母親が育児に困難を感じている。

「育児不安」という言葉は研究者によって様々な定義がなされているが、主に育児の際の精神的不安定さの総称を指しており、具体的な育児の疲労感や負担感を表す育児ストレスを含むものと考えられている。このような母親の育児不安は、「母親だけでなく多くの人が子どもを育ててくれている」という意識（牧野, 1982）、夫の家事・育児への参加に対する母親の満足感（牧野・中西, 1985）、夫婦の会話頻度（加藤ら, 2002）と関連することが示されており、周囲の人からのサポートが育児不安を軽減する可能性が示唆される。しかし、夫以外の個別の対象についての詳細な検討はされていないため、母親にとって誰からのサポートが最も影響しやすいのか、相対的に調べる必要があるだろう。

また、子どもが生得的に持っている順応性の悪さなどの気質の特徴は母親の育児ストレスに影響することが示されており（水野, 1998）、母親の育児不安を考える際に、子ども側から母親に与える影響についても視野に入れる必要があると考えられる。

さらに、母親の育児不安は子どもへの干渉的な養育態度を強め、間接的に子どもの社会性の発達に影響することが示されている（加藤ら, 2002）。育児不安が子どもの発達に間接的に影響する可能性があることから、育児不安と養育態度とのつながりについて、詳細な検討を行う必要があるだろう。

そこで本研究では、乳幼児期の子どもを持つ母親の育児不安について、否定的養育行動への影響、夫や夫以外の対象からのサポート、子どもの気質的特との関連について検討し、母親の育児不安を取り巻く要因の一連の流れを総合的に明らかにすることを目的とする。

## 方 法

調査対象：山形県米沢市内の私立保育園（6園）に乳幼児期の子どもを預けている母親と、山形市内の育児サークル（10カ所）に在籍する乳幼児を持つ母親、計374名を対象とした。対象となった母親の就業形態は、有職（フルタイム、自営、パート・アルバイト）が37.4%、専業主婦が38.2%とほぼ同数だった。母親の年齢は、30～34歳が最も多く（42.8%）、次いで25～29歳（30.2%）が多かった。乳幼児期の子どもの平均月齢は39.82ヶ月（SD=19.24、範囲0ヶ月～75ヶ月）、性別は男児48.7%、女児50.3%で、第1子が79.7%を占めていた。子どもの数は1人が最も多く51.9%で、2人が38.8%、3人が8.0%、4人が0.5%だった。家族形態は核家族が69.5%と7割近くを占めていた。

調査手続き：2002年7月～8月に、保育園と育児サークルを通して母親への質問紙の配布と回収を行った。配布は全体で470部、回収は374部（回収率79.6%）、うち有効回答数は372部だった。

質問紙の内容：母親の育児不安について、牧野（1982）の「育児不安測定尺度」14項目と「子育て以外の生きがい」の2項目、「子どもとの一体感」の3項目を併せ、計19項目を「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階評定で尋ねた。また、子どもの気質について北海道青少年育成協会（2002）の「育てにくさ」9項目を、母親の否定的な養育態度について北海道青少年育成協会（2002）の「非統制的養育行為」19項目を採用し、それぞれ同じく5段階で尋ねた。

「非統制的養育態度」とは、虐待までは行かないが母親がコントロールを失った状態での行き過ぎた否定的養育態度のことである。さらに、母親が普段受けているサポートについて、夫婦関係、夫の家事・育児参加、周囲からのサポートについて尋ねた。夫婦関係は、野澤（1999）の「夫婦の様子」から5項目を採用し、「夫婦の同伴行動」の4項目、牧野（1982）の夫の育児責任に関する1項目、独自に作成した夫婦の会話時間に関する1項目（「夫婦で毎日会話をする」）を併せ、計11項目を「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の5段階で尋ねた。夫の家事・育児参加は、野澤（1999）の家事・育児に関する7項目から6項目を採用し、ベネッセ教育研究所（2000）の「母親から見た父親の育児状況」の4項目、独自に作成した2項目（「子どもと遊ぶ」「子どもに教育する」）を併せ、計12項目を「ほとんど毎日」から「ほとんどない」の4段階で評定してもらった。周囲からのサポートは、野澤（1999）の「家族以外からの援助」の項目を参考に作成した5項目（「〇〇は心配事や悩みを聞いてくれ、自分の気持ちや考えを理解してくれる」「〇〇と一緒にとても楽しく過ごせる」「〇〇は助言やアドバイスをしてくれる」「急な用事ができた時や病気の時などに、〇〇は気軽に子どもの世話を頼める」「〇〇に気を使わなければならないので大変だ」）について、〇〇の部分に「自分の親」「夫の親」「友人」「親戚」「近所の人」をあてはめた質問項目をそれぞれ作成し、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の5段階で尋ねた。

尺度の分析：各質問項目について、因子分析や主成分分析を行い、尺度を作成した。

- ① 育児不安尺度 母親の育児不安について尋ねた質問項目の因子分析（主因士法、バリマックス回転）を行った結果、3つの因子が抽出された（Table1 参照）。ただし、因子負荷量が.30未満だった2項目は分析から省かれた。第1因子は「育児ストレス」（ $\alpha = .84$ ）と命名し、負荷量がマイナスだった項目の得点を逆転し、10項目の得点を足し合わせて「育児ストレス得点」とした。第2因子は「成長感」（ $\alpha = .51$ ）と命名し、負荷量がマイナス

だった項目の得点を逆転し、4項目の得点を足し合わせて「成長感得点」とした。第3因子は「一体感」（ $\alpha = .60$ ）と命名し、3項目の得点を足し合わせて「一体感得点」とした。

Table1. 母親の育児不安尺度の因子構造

項 目	因子1	因子2	因子3
<b>【第1因子 育児ストレス】</b>			
・子どものことがわずらわしくてイライラしてしまう	.709		
・考えごとがおっくうでいやになる。	.701		
・毎日くたくたに疲れる。	.612		
・子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う。	.577		
・子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある。	.563		
・自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう。	.542		
・生活にゆとりを感じる。	-.516		
・毎日はりつめた緊張感がある。	.453		
・自分は子どもをうまく育てていると思う。	-.375		
・朝、目覚めがさわやかである。	-.338		
<b>【第2因子 成長感】</b>			
・母親だけでなく、大勢の人が子どもを育ててくれていると感じる。		.456	
・毎日毎日同じことのくり返ししかしていないと思う。		-.450	
・子どもから離れてやりたいことができていくと感じる。		.416	
・育児によって自分が成長していると感じられる。		.408	
<b>【第3因子 一体感】</b>			
・子どもにのめりこみそうになる。			.686
・子どもだけが生きがいであるとを感じる。			.516
・子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない。			.510
因子寄与率 (%)	19.27	9.13	7.91

- ② 否定的養育態度尺度 母親の否定的な養育行動について尋ねた質問項目の主成分分析を行った結果（Table2 参照）、1つの合成変数が作成された（ $\alpha = .87$ ）。ただし、因子負荷量が.30未満だった5項目は分析から省かれた。そこで、負荷量がマイナスだった項目の得点を逆転し、14項目の得点を足し合わせて「非統制的養育行為得点」とした。

Table2. 非統制的養育態度尺度の成分負荷量

項 目	成分負荷量
・子どもを怒鳴りだすととまらなくなる。	.828
・なかなか子どもを許せない。	.757
・子どもを思わずたたいてしまう。	.743
・思わず子どもが傷つくようなことを言ってしまう。	.736
・子どもが言ってわからなければたいたりする。	.686
・子どもを思わず強い口調でしかってしまう。	.636
・子どもを思わず無視してしまう。	.631
・子どもが言うことをきくまでしかる。	.619
・子どもをいったんたくと止まらなくなる。	.616
・子どもにおだやかに言い聞かせる。	-.607
・思わず子どもをどこかに閉じ込める。	.451
・子どもの気持ちがおさまるのを待つ。	-.391
・子どもの良いところを見つけてほめる。	-.389
・思わず子どもを外に出す。	.385

- ③ 子どもの気質尺度 子どもの気質について尋ねた質問項目の主成分分析を行った結果

(Table3 参照)、1つの合成変数が作成された ( $\alpha = .74$ )。そこで、9項目の得点を足し合わせて「子どもの気質得点」とした。

Table3. 子どもの気質の育てにくさ尺度の成分負荷量

項 目	成分負荷量
・子どもがだだをこねて、手をつけられないことがある。	.817
・子どもがかんしゃくをおこす。	.756
・子どもの落ち着きがなく、じっとしていない。	.663
・子どもに寝つきの悪さや夜泣きがある。	.553
・子どもが他の子とうまく遊べない。	.548
・子どもの排泄がうまくいかない。	.539
・子どもの食事がうまくいかない。	.456
・子どものことばが遅い。	.400
・子どもが病気がちである。	.340

- ④ 夫婦関係尺度 夫婦関係について尋ねた質問項目の主成分分析を行った結果 (Table4 参照)、1つの合成変数が作成された ( $\alpha = .77$ )。そこで、負荷量がマイナスだった項目の得点を逆転し、11項目の得点を足し合わせて「夫婦関係尺度」とした。

Table4. 夫婦関係尺度の成分負荷量

項 目	成分負荷量
・私は夫にとっても満足している。	.840
・私は夫といるととても楽しい。	.839
・夫は私の心配事や悩みを聞いてくれる。	.813
・夫は私の気持ちや考えを理解してくれる。	.812
・夫婦で毎日会話をする。	.780
・夫は私の能力や努力を高く評価してくれる。	.759
・夫婦でよく旅行やドライブに行く。	.702
・夫婦でよく共通の趣味を楽しむ。	.698
・夫婦でよくショッピングに行く。	.676
・夫は育児に責任を持っていないと思う。	-.603
・夫婦ぐるみでよく友人を招いたり招かれたりする。	.557

- ⑤ 夫の家事・育児参加尺度 夫の家事・育児参加について尋ねた質問項目の因子分析 (主成分法、バリマックス回転) を行った結果、2つの因子が抽出された (Table5 参照)。第1因子は「夫の育児参加」 ( $\alpha = .84$ ) と命名し、6項目の得点を足し合わせて「夫の育児参加得点」とした。第2因子は「夫の家事参加」 ( $\alpha = .70$ ) と命名し、6項目の得点を足し合わせて「夫の家事参加得点」とした。
- ⑥ 周囲からのサポート サポートについて尋ねた5項目 (Table6 参照) を、「自分の親」「夫の親」「友人」「親戚」「近所の人」それぞれにおいて主成分分析を行った結果、すべて同

様に1つの合成変数が作成された。「自分の親」「夫の親」「友人」「親戚」については、負荷量がマイナスだった項目 (「〇〇に気を使わなければならないので大変だ」) の得点を逆転し、5項目の得点を足し合わせて、それぞれ「実父母からのサポート得点」 ( $\alpha = .77$ ) 「義父母からのサポート得点」 ( $\alpha = .80$ ) 「友人からのサポート得点」 ( $\alpha = .69$ ) 「親戚からのサポート得点」 ( $\alpha = .89$ ) とした。「近所の人」については、因子負荷量が.30未満だった1項目 (「近所の人に気を使わなければならないので大変だ」) は分析から省かれ、4項目の得点を足し合わせて「近所の人からのサポート得点」 ( $\alpha = .90$ ) とした。

Table5. 夫の家事・育児参加尺度の因子構造

項 目	因子 1	因子 2
[第1因子 夫の育児参加]		
・子どもに教育する。	.732	
・子どもをしかったりほめたりする。	.712	
・子どもと一緒に遊ぶ。	.709	
・子どもをお風呂に入れる。	.628	
・子どもが病気の時、面倒を見る。	.618	
・子どもを寝かしつける。	.604	
[第2因子 夫の家事参加]		
・風呂の準備・掃除		.696
・料理・あとかたづけ		.595
・洗濯		.583
・ゴミだし		.538
・掃除		.482
・ふとんのあげおろし		.304
因子寄与率 (%)	23.60	17.00

Table6. 周囲からのサポートに関する項目

項 目
・〇〇は心配事や悩みを聞いてくれ、自分の気持ちや考えを理解してくれる。
・〇〇は助言やアドバイスをしてくれる。
・〇〇と一緒にとても楽しく過ごせる。
・〇〇に気を使わなければならないので大変だ。
・急な用事ができた時や病気の時などに、〇〇に気軽に子どもの世話を頼める。

## 結 果

### 1. 育児不安に関連する要因

育児不安に関連する要因について、基本的属性、子どもの気質、サポートについて検討を行った。

まず、基本的属性と母親の育児不安の下位尺度との関連については、子どもの月齢と「育児ストレス」との間に正の相関が見られ ( $r=.17, p<.01$ )、乳幼児期の子どもの月齢が高いほど母親の育児ストレスが高いことが示された。また、「成長感」において母親の就労形態による違いが見られ ( $t=2.73, p<.01$ )、有職の母親 ( $M=13.38, SD=2.67$ )の方が専業主婦の母親 ( $M=12.62, SD=2.33$ )より育児による成長感が高いことが示された。母親の年齢、子どもの性別、出生順位、子どもの数、家族形態は母親の育児不安と有意な関連が見られなかった。

子どもの気質と育児不安の下位尺度との関連については、子どもの気質的育てにくさは母親の「育児ストレス」と有意な正の相関 ( $r=.50, p<.001$ ) が、「成長感」と有意な負の相関 ( $r=-.30, p<.001$ ) があることが示された。

サポートと育児不安との関連については、「育児ストレス」と夫婦関係 ( $r=-.40, p<.001$ )、夫の家事参加 ( $r=-.13, p<.05$ )、夫の育児参加 ( $r=-.26, p<.001$ )、実父母からのサポート ( $r=-.22, p<.001$ )、義父母からのサポート ( $r=-.32, p<.001$ )、友人からのサポート ( $r=-.17, p<.01$ )、親戚からのサポート ( $r=-.11, p<.05$ ) のいずれもが負の相関があることが示された。また、「成長感」と夫婦関係 ( $r=.43, p<.001$ )、夫の家事参加 ( $r=.20, p<.001$ )、夫の育児参加 ( $r=.33, p<.001$ )、実父母からのサポート ( $r=.26, p<.001$ )、義父母からのサポート ( $r=.28, p<.001$ )、友人からのサポート ( $r=.13, p<.01$ )、親戚からのサポート ( $r=.28, p<.001$ ) のいずれもが正の相関があることが示された。

以上の結果から、育児不安の下位尺度である「育児ストレス」、「成長感」には複数の要因が関連していることが示された。そこで、どの要因がどれくらい「育児ストレス」、「成長感」に影響しているかを検討するために、重回帰分析を行った。まず、「育児ストレス」を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行ったところ ( $R^2=.32$ ,

$F=13.50, p<.001$ )、母親の育児ストレスの高さは、子どもが気質的に育てにくいこと、夫婦関係の良好さが低いこと、義父母からのサポートが少ないことが有意に説明していた (Table7 参照)。次に、「成長感」を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行ったところ ( $R^2=.30, F=11.98, p<.001$ )、母親の成長感の高さは、母親が有職であること、夫婦関係が良好であること、実父母、義父母、親戚からのサポートがそれぞれ多いことが有意に説明していた (Table8 参照)。

**Table7. 育児ストレスを従属変数とした重回帰分析**

従属変数：育児ストレス		
	Beta	t
<b>独立変数</b>		
子どもの月齢	.10	1.81+
子どもの気質的育てにくさ	.38	6.97***
夫婦関係	-.22	-3.28**
夫の家事参加	-.06	-1.06
夫の育児参加	.03	.39
実父母からのサポート	-.08	-1.55
義父母からのサポート	-.12	-2.12*
友人からのサポート	-.02	-.33
親戚からのサポート	-.01	-.10

+  $p<.10$ , \*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$

**Table8. 成長感を従属変数とした重回帰分析**

従属変数：成長感		
	Beta	t
<b>独立変数</b>		
母親の就業の有無	-.12	-2.08*
子どもの気質的育てにくさ	-.09	-1.56
夫婦関係	.26	3.65***
夫の家事参加	.04	.59
夫の育児参加	.10	1.49
実父母からのサポート	.12	2.14*
義父母からのサポート	.12	2.02*
友人からのサポート	.04	.63
親戚からのサポート	.14	2.52*

## 2. 否定的養育態度と関連する要因

否定的養育態度と関連する要因について、育児不安、基本的属性、子どもの気質、サポートについて検討を行った。

まず、育児不安の下位尺度と否定的養育態度との関連については、「育児ストレス」と非統制的養育態度との間に正の相関が見られ ( $r=.50$ ,  $p<.001$ )、育児ストレスが高いほど子どもにコントロールを失った否定的養育態度を取ることが多いことが示された。さらに、「成長感」との間に負の相関が見られ ( $r=-.30$ )、育児による成長感が高いほど子どもにコントロールを失った養育態度を取ることが少ないことが示された。

基本的属性と母親の否定的養育態度との関連については、母親の就労形態による違いが見られ、専業主婦の母親 ( $M=33.54$ ,  $SD=9.09$ ) の方が有職の母親 ( $M=30.81$ ,  $SD=7.72$ ) より非統制的養育行為を多く行うことが示された ( $t=-2.88$ ,  $p<.01$ )。また、子どもの出生順位による違いが見られ、乳幼児期の子どもが第2子以降の群 ( $M=35.59$ ,  $SD=6.97$ ) の方が第1子の群 ( $M=31.13$ ,  $SD=8.39$ ) よりも、母親が非統制的養育行為を多く行うことが示された ( $t=-4.57$ ,  $p<.01$ )。さらに、乳幼児期の子どもの月齢、子どもの数、母親の年齢との相関が見られ、乳幼児期の子どもの月齢が高いほど ( $r=.39$ ,  $p<.001$ )、子どもの数が多いほど ( $r=.23$ ,  $p<.001$ )、母親の年齢が高いほど ( $r=.18$ ,  $p<.01$ )、それぞれ母親が非統制的養育行為を多く行うことが示された。子どもの性別、家族形態は母親の否定的養育態度と有意な関連が見られなかった。

子どもの気質と否定的養育態度との関連については、子どもの気質的育てにくさは「非統制的養育態度」と有意な正の相関があることが示された ( $r=.30$ ,  $p<.001$ )。

サポートと否定的養育態度との関連については、夫婦関係 ( $r=-.25$ ,  $p<.01$ )、夫の育児参加 ( $r=-.26$ ,  $p<.01$ )、実父母からのサポート ( $r=-.21$ ,  $p<.01$ )、義父母からのサポート ( $r=-.16$ ,  $p<.01$ )、親戚からのサポート ( $r=-.14$ ,  $p<.05$ ) と負の相関があることが示された。

以上の結果から、母親の否定的養育態度である「非統制的養育態度」には複数の要因が関連して

いることが示された。そこで、どの要因がどれくらい「非統制的養育態度」に影響しているかを検討するために、重回帰分析を行った。「非統制的養育態度」を従属変数とした重回帰分析（強制投入法）を行ったところ ( $R^2=.41$ ,  $F=13.33$ ,  $p<.001$ )、母親の非統制的養育態度の高さは、子どもの月齢が高いこと、母親が専業主婦であること、子どもが気質的に育てにくいこと、育児ストレスが高いことが有意に説明していた (Table9 参照)。

Table9. 非統制的養育態度を従属変数とした重回帰分析

従属変数：非統制的養育態度		
	Beta	t
<b>独立変数</b>		
子どもの月齢	.35	5.92***
子どもの出生順位	.09	1.46
子どもの数	.03	.49
母親の年齢	.00	.01
母親の就業の有無	.10	1.98*
子どもの気質的育てにくさ	.17	3.00**
夫婦関係	.07	1.08
夫の育児参加	-.08	-1.23
実父母からのサポート	-.07	-1.27
義父母からのサポート	.05	.83
親戚からのサポート	-.05	-1.02
育児ストレス	.33	5.17***
成長感	-.06	-.90

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$

## 3. パス解析

重回帰分析で、母親の育児ストレスの高さが非統制的養育態度の高さを有意に説明したことから、育児ストレスが非統制的養育態度に影響を及ぼすと仮定したモデルに、各要因をあてはめ、パス解析を行った。その結果を Fig.1 のパス図、Table10 に示す ( $CFI=.98$ ;  $RMSEA=.07$ , 範囲 .03 ~ .11)。

パス解析の結果、母親の育児ストレスは非統制的養育態度に影響し、子どもの気質的育てにくさは、育児ストレス、非統制的養育態度の両方に影響することが示された。また、夫婦関係と義父母からのサポートは育児ストレスのみに影響し、子

どもの月齢、母親の就業の有無は非統制的養育態度のみに影響することが示された。

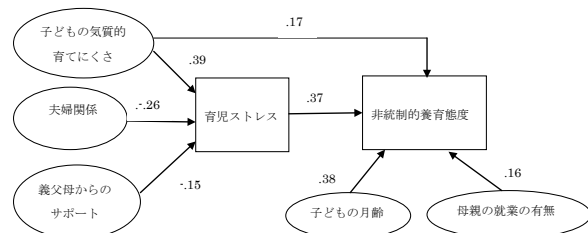


Fig.1 育児ストレスと非統制的養育態度への影響

Table10. 育児ストレスと非統制的養育態度への影響のパス係数

説明変数	育児ストレス		非統制的養育態度	
	直接効果	間接効果	直接効果	間接効果
子どもの気質的育てにくさ	.39***	.00	.17***	.14
夫婦関係	-.26***	.00	.00	-.10
義父母からのサポート	-.15**	.00	.00	-.05
子どもの月齢	.00	.00	.38***	.00
母親の就業の有無	.00	.00	.16***	.00
育児ストレス			.37***	.00

\*\* p<.01, \*\*\* p<.001

## 考 察

本研究では、乳幼児期の子どもを持つ母親の育児不安と関連する要因について、母親の否定的養育態度を含めた検討を行った。

子どもの月齢、母親の就業の有無といった基本的属性の他に、子どもの気質、サポートといった影響要因について分析したところ、育児不安の中でも「育児ストレス」が母親の非統制的養育態度に影響することが明らかになった。近年、育児不安を感じる母親が多いことが指摘されているが(労働政策研究・研修機構, 2003)、子どもへの行き過ぎた養育態度育につながる可能性があることから、育児不安の中でも、「イライラする」「くたくたに疲れる」といった育児ストレスの軽減が特に必要とされると考えられる。

育児ストレスの軽減について、本研究では子どもが育てにくい気質ではないこと、夫婦関係の良好さ、義父母からのサポートといった要因が影響することが示された。子どもの気質は生得的なもので変えることは難しいが、夫婦関係や義父母からのサポートは人的な資源であるため、乳幼児期の子どもを持つ母親への身近な人の関わりにより軽減できる可能性が示唆される。また、本研究で

は先行研究(牧野, 1985)と同様に、夫の家事・育児への参加は母親の育児不安と直接関連しなかった。その一方で、母親が夫婦関係を良好であると認識している場合には、育児ストレスが軽減されることが明らかになった。日本の男性の家事・育児時間は欧米諸国と比較して短いため(内閣府, 2010)、夫が物理的に子育てをサポートする時間が限られている。そのため、情緒的に良好な夫婦関係を築くことの方が、母親の育児ストレスの軽減に効果が出たのかもしれない。また、本研究では、母親の親ではなく、夫の親である義父母からのサポートが育児ストレスの軽減に影響することが示された。この理由として、母親自身の親は義父母よりも子どもを預けるなどのサポートを頼みやすいことから(横浜市教育委員会・預かり保育推進委員会, 2000)、母親自身の親よりも夫の親のサポートの程度の方が、家庭によって差が出やすい要因であったことが影響した可能性がある。子育てでサポートが必要となった場合に母親は自分自身の親に頼むことが多いだろう。しかし、母親自身の親にサポートを頼めない状況になった時に、夫の親にサポートを頼めるかといった複数のサポート資源の利用可能性の有無が、母親の育児ストレス軽減の決め手となるのかもしれない。

子どもの気質的育てにくさは、母親の育児ストレス、非統制的養育態度の両方に影響していた。子どもの気質が育児ストレス(水野, 1998)や養育行動(Lee & Bates, 1985; Gauvain & Fagot, 1995など)に影響することは、これまでも多くの研究で示されている。気質は生得的な個人差であることへの理解、気質をふまえた養育の仕方など、母親への子育て知識とスキルの向上が一層必要とされるだろう。

さらに本研究では、母親の非統制的養育態度には、育児ストレスの他にも乳幼児期の子どもの月齢の高さ、母親の就業の有無が影響することが示された。子どもの月齢が上がることにより、親側にはしつけの必要性が出てくるのに対して、子どもの自我が芽生え、言うことを聞かない、反抗するといった状況も出てくるため、行き過ぎた養育行動を取る母親が出やすいことが示唆される。母親の就業については、専業主婦の方が有職の母親

よりも非統制的養育態度を多く取ることが示された。児童虐待をする親が抱えている問題の一つとして、育児の孤立化が挙げられる。核家族化が進み、地域とのつながりが希薄化している現代社会では、専業主婦の母親の方が社会との接点が少ないため、育児が孤立化し、子どもに行き過ぎた養育態度を取りやすい状況に陥っているのかもしれない。

今後は、本研究の結果をふまえ、母親の育児ストレスや非統制的養育態度を軽減するための方策を考えていく必要があるだろう。特に、身近な人のサポートの重要性や、子どもの気質、子どもの月齢、母親の就業の有無などのリスク要因をふまえ、子育ての知識やスキルの向上を含めた効果的な子育て支援について、社会全体の問題としてとらえていく必要があると考える。

#### 引用文献

- ベネッセ教育研究所 (2000). 「第2回幼児の生活アンケート」.
- Gauvain, M., & Fagot, B. (1995). Child temperament as a mediator of mother-toddler problem solving. *Social Development*, 4, 257-276.
- 北海道青少年育成協会 (2002). 北海道における少子化に関する研究：育児をめぐる家族関係と児童虐待に関する研究, Vol.4.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土屋みち子 (2002). 父親の育児かわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から. *発達心理学研究*, 13, 30-41.
- Lee, C. L., & Bates, J. E. (1985). Mother-child interaction at age two years and perceived difficult temperament. *Child Development*, 56, 1314-1325.
- 牧野カツコ (1982). 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉. *家庭教育研究所紀要*, 3, 34-56.
- 牧野カツコ・中西雪夫 (1985). 乳幼児をもつ母親の育児不安：父親の生活および意識との関連. *家庭教育研究所紀要*, 6, 11-24.
- 宮本政子・舟越和代・中添和代・時岡恵美・森美代子・渋谷幸彦 (2000). 乳幼児をもつ母親の育児不安の現状とその要因. *香川県立医療短期大学紀要*, 2, 115-121.
- 水野里恵 (1998). 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究. *発達心理学研究*, 9, 56-65.
- 内閣府 (2010). 「男女共同参画白書」.
- 野澤慎司 (1999). 妻たちの援助動員にみる地域差：夫婦関係と援助ネットワークに対する大都市居住効果. 高橋勇悦・石原邦雄 (編), 妻たちの生活ストレスとサポート関係：家族・職業・ネットワーク (Pp203-237). 東京都立大学都市研究所.
- 労働政策研究・研修機構 (2003). 「育児や介護と仕事の両立に関する調査」.
- 櫻谷真理子 (2002). 今子育て支援に求められていること：子育ての不安から安心の子育てへ. 垣内国光・櫻谷真理子 (編著), 子育て支援の現在：豊かな子育てコミュニティの形成をめざして (Pp1-23). ミネルヴァ書房.